

模擬授業へのピア・フィードバックに関する研究

—オンラインフィードバックと紙面フィードバックとの比較—

福島知津子
(文学部英文学科)

2021年度はコロナ禍の影響により、英語科教員志望の大学生が受講する英語科教育法の授業において、対面とオンラインの両方の環境下で模擬授業を行い、クラスメイトから模擬授業に対する筆記フィードバックが提供された。そこで紙面フィードバックとオンラインフィードバックの両方を経験した参加者を対象にアンケート調査を実施した。その分析結果は、僅差であるが紙面フィードバックの方がより肯定的にとらえられているとの結果を得た。加えて、自由記述回答をテキストマイニングで分析したところ、紙面フィードバックは手書きの文字やイラストに書き手の「気持ち」を感じるという印象で受け取られていることがわかった。

キーワード：外国語科，教職課程，模擬授業，ピア・フィードバック，テキストマイニング

1. はじめに

2020年度は新型コロナウイルス対策の特別措置法により4月16日から全国に緊急事態宣言が発令された。それにより全国の多くの大学における授業は、教師と学習者にとってこれまでは「普通」と思っていた対面での授業をオンラインで実施することを余儀なくされた。

筆者が担当したオンライン授業の中でも最も苦慮した科目が外国語科教員免許取得に必修科目と大学が設定している各教科の指導法に関する科目、具体的には英語科教育法であった。本学の英語科教育法では、受講生が授業実践を試みる模擬授業（マイクロティーチング）を15回の授業回数の内、高い比重をもって実施している。他教科、他科目にはオンライン形態の授業に変更したことで学習に有効に働いたものもあると推測する。しかし、授業はこれまで受ける側でしか経験のない大学2年生が模擬とはいえ初めて自分の授業を試みるのがオンラインの環境下になっては、あまりに教育実習先で行わ

れる授業と環境およびその条件が大きく異なる。まずこれまで筆者が「普通」と思っていた教室内での言語活動や教具は活用できないものがほとんどだった。とはいえ、当時は緊急事態宣言がいつ撤回されるのかも定かではなく、限られた環境下で学習を進めるほか選択の余地はなかった。そこで考えられたことは、模擬授業は授業を設計するそのプロセスに多くの学びが点在しており、オンライン授業であってもこれを止める理由はなかった。

授業デザイン設計のプロセスとその振り返りという作業について牧野(2012)では「体験と省察とを往還させる教員養成カリキュラムにおいては、教育実践の省察力向上にむけた取り組み検討が必要ではないか」と述べられている。つまり、省察があって模擬授業の学びは一旦完了と考える。吉住(2022年)はコロナ禍の初年にオンライン授業における模擬授業について早々に次のように述べている。「内省的な振り返りはオンライン授業であっても教師の成長に欠かせな

に受講生には伝えている。

3. 調査

3.1 調査の目的

模擬授業後のピア・フィードバックの方法について、紙面とオンライン形態それぞれにどのような印象を持っているかについて、理由も含めてアンケートを基に調査する。

3.2 調査時期と参加者

2022年1月17日～2月12日の期間に、英語科教育法2の受講生($N=18$)に授業時間外にLMSを経由して回答を依頼した。回答は強制されるものではなく任意とし、成績には一切関与しないことも説明文に記載された。

調査参加者は大学2および3年生の16名より回答が得られた。

3.3 調査方法と質問肢

アンケート調査はウェブ上で実施された。Microsoft Office 365の機能に含まれるFormsにてアンケートを作成し、ウェブ上で回答を得た。各質問肢は以下に記載する。Q6/7/10/12は自由記述回答とし、それ以外の回答には選択肢を設定した。選択肢には「4. とてもそう思う/3. まあそう思う/2. あまりそう思わない/1. まったくそう思わない」の4件法を採用した。(Q11のみ2件法とした。)

「紙面でのフィードバックとPCでワードに記載するフィードバックとでは・・・」

Q1 授業者へ渡すまでの時間に違いがある

Q2 書く量に違いがある

Q3 書くスピードに違いがある

Q4 書く内容に違いがある

Q5 何に一番違いを感じたか

Q6 その他を書いて下さい(自由記述)

Q7 紙面とオンラインでは、何に一番違いを感じたか(自由記述)

Q8 前向きに受け取れた印象(うれしかった、勉強になった)に違いがあった

Q9 「傷ついた、きつい」と感じたコメントはあった。

Q10 Q9でのコメントを教えてください(自由記述)

Q11 Feedbackをあげる方、またもらう方とを総合的に考えて、クラスメイトとのFeedbackはどの方法が良いか

Q12 Q11と回答した理由を書いて下さい(自由記述)

4. 分析

4.1 分析方法

Office 365のFormsに集約されたデータをエクセルに入力し、各回答を記述統計とクロス集計の分析を行った。自由記述回答はエクセルに入力し、今回はKH Coder 3(牛澤, 2021; 樋口, 2014)を使い、テキストマイニングの手法で抽出語を分析し、集約された回答を量および質の両面から検討する。

4.2 分析結果

Q1,2,3,4,8,9の分析(記述統計)の結果を次の表1に記す。Q1(模擬授業担当者にフィードバックを渡すまでにオンラインと紙面では差があるか)について尋ねている。表1に示す通り、模擬授業者へピア・フィードバックを渡すまでの時間に差があると感じたのは75%と多くが感じている。その一方Q2(書く分量に差があるか)では、差があると感じたのは50%、差を感じなかったのは50%と量的には意見が分かるところとなった。Q3(書くスピードに差があるか)とQ4(書く内容に差があるか)の結果も差があると感じたのは50%、差を感じなかったのは50%と量的には意見が分かれた。フィードバックを記入する時間やその内容に差を感じるものとそうでないものの意見が半分に分かれる結果となった。

Q8(前向きに受け取れた印象(うれしかった等に違いがあった)違いがあったが33.3%、違いはなかったが66.7%という結果を得た。記述統計だけを見れば、紙面とオンラインの差にはあまり差はなく、とても違いを感じたのは1名という結果であった。

表1 Q1 から Q9 の結果

	Q1: 渡すまでに 時間に差があり ますか		Q2: 書く量に差 がありますか		Q3: 書くスピード に差があります か		Q4: 書く内容に 差がありますか		Q8: 前向きに受 け取れた印象 (うれしかった 等) に差があり ますか		Q9: 「傷つい た、きつい」と 感じるコメント はありましたか	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
とても差がある	2	12.5	2	12.5	1	6.25	1	6.25	1	6.7	0	0.0
まあ差がある	10	62.5	6	37.5	7	43.75	7	43.75	4	26.7	4	25.0
あまり差はない	2	12.5	5	31.25	5	31.25	5	31.25	7	46.7	6	37.5
ほとんど差はない	2	12.5	3	18.75	3	18.75	3	18.75	3	20.0	6	37.5
計	16	100	16	100	16	100	16	100	15	100	16	100

Q9には、数が少ないとはいえ「クラスメイトからの筆記フィードバックに『傷ついた、きつい』と感じた」に対して「まああったと思う」の回答が25%(N=4)であった。Q10にそれら具体的な記述が記されたものを以下表2に記す。

表2 記述例

ア	自分が授業後に反省したこと、自分でもっとこうすべきだったと認識していること feedbackで改めて書かれてあると少し落ち込んだ
イ	マイナス面のみが書かれており、もっとこうした方がよいなどの具体的な方法が書かれていなかったもの
ウ	顔が怖い
エ	テンションが低くてプリントを配る際の声が怖くて身構えてしまった
オ	特定でこのコメントがきついとかではなく、進め方が早い・声が小さいなどのコメントでも、Wordで送られてくると自分の授業は退屈だったかなとか、あまりよくなかったかなと思うことがありました。

記述アは、紙面/オンラインのいずれであれ少し落ち込むことがあっても今後の授業には必要とされる改善点であったろうと推測する。しかし、記述イは改善点しか言われないと誰もきついという印象をもつだろう。記述ウとエは、なぜ

その表情になったか、なぜテンションが低くなったのかについて言及されず、ただ「怖かった」、「身構えた」という表現だけでは誰も書かれた内容に対して不審を感じる。記述オは回答数としては1件だが見逃せない記述である。ワードファイルに記載されている改善点に「授業が退屈だった」や「よくなかったのか」という言外の否定的な印象が付与される可能性について言及されている。

次の表3は、Q11（模擬授業のクラスメイトとのフィードバックはどの方法が良いか）では、オンライン希望が18.8%、紙面希望が81.3%と紙面希望がかなり多い結果を得た。

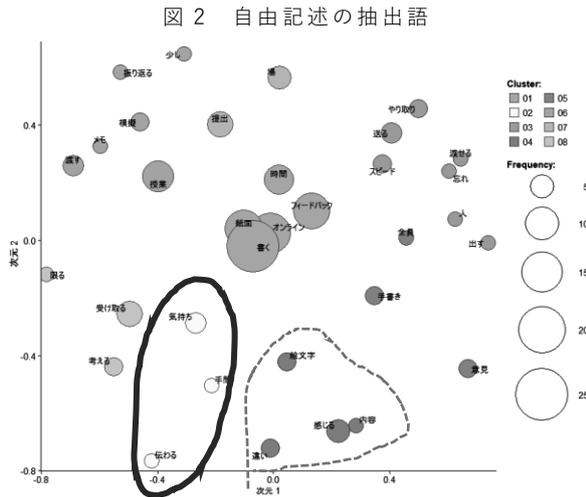
表3: Q11の結果

Q11「模擬授業のクラスメイトとのFeedbackはどの方法が良いでしょうか？」	N	%
オンライン	3	18.8
紙面	13	81.3
計	16	100

ここで注意したいのは、クロス集計結果で得られた紙面希望を回答した13名のうち、その93%は「双方に違いはない」とQ1にて回答している点である。これは紙面希望とはいっても、圧倒的な支持とは言えず、紙面希望ではあっても、どちらかといえば紙面を選んだと判断すべきであろう。模擬授業に対するピア・フィードバ

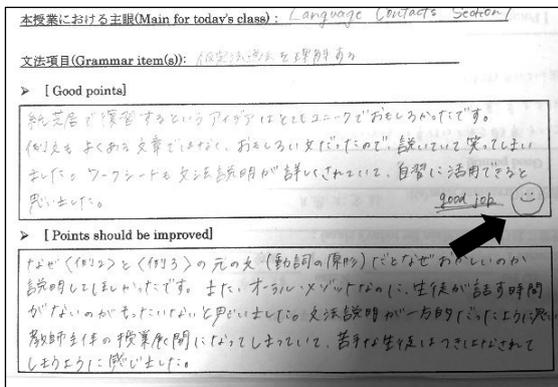
クの方法は紙面希望かまたは、オンライン希望かについて、今回の参加者の場合、その差は僅差であったと言える。

ここからは自由記述回答のテキストマイニング分析結果を示す。図2は自由記述回答の抽出語を分析した多次元尺度法の図である。



点線で囲った4つのバブルプロットには「絵文字」、「内容」、「感じる」、「違い」の語が関連語として分類されている。一方隣の実線で囲われた語は、「気持ち」「手間」「伝わる」という語が同じ分類となっている。これらは以下にあるフィードバックシート例に書かれたコメントのほかに手書きのイラストや good job! のような欄外のコメントのことを指していると考えられる。

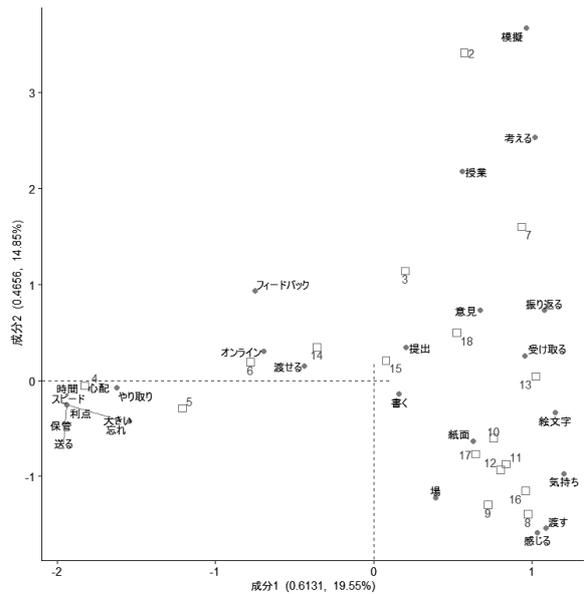
フィードバックシート例



他にもディズニーのキャラクターなどが手書き

で描かれ、さらに吹き出しに「お疲れ様でした」と書かれているシートなどもあった。イラストなどが無くても、欄外に「おつかれさまでした」（全てひらがな）や「1番最初だったのにすごく良かったです」などの公式フィードバックよりも他の言葉が「気持ち」を「感じる」に該当しているものと考えられる。これらは本科目の授業担当者がピア・フィードバックへの留意点で伝えたものではなく、受講生のなかで自然と（いわば授業担当者が知らぬ間に）書かれたものだった。それが1, 2名というのではなく、かなりの人数が頻繁に記載していることが紙面のフィードバックシートを授業担当者が回収した際に目にすることがあった。

図3 Q11とQ12の対応分析表



上の図3はQ11とQ12の対応分析表である。Q11で「オンライン」と回答した参加者がQ12でどのような記述をしているか、また逆にQ11で「紙面」と回答した参加者がQ12でどのような記述をしているかをKH Coda3が視覚的に表している。Q11では「オンライン」と回答しつつも、Q12の自由記述回答にその関連する語は周辺には見当たらない。「渡せる」と「フィードバック」という語だけである。「オンライン」は渡すというよりも送信したはずなので、「オンラ

イン」でのピア・フィードバックに関する印象に残った単語はほぼなかったことになる。一方、「紙面」と回答した参加者が Q12 にて記載した自由記述回答には「紙面」の周辺に「絵文字」「気持ち」「表す」「感じる」という語が見て取れる。これは授業を客観的に観察し、省察する行為とは反するものであり、とても主観的である。しかし、それがオンラインと紙面の差異であることがこの分析から明らかとなった。

5. おわりに

5-1 考察

大学生のクラスメイトに対してとはいえ、初めて行う英語での30分間の模擬授業は教員が想像している以上に、学生にとってハードルが高いことを認識することができた。それゆえ、模擬授業者は筆記ピア・フィードバックに対して敏感、中には過敏になっているとしてもそれは自然なことと言える。テキストマイニングの分析結果から、ピア・フィードバックを提供する側となっても、受ける側となっても参加者は特に「改善すべき点」(Points should be improved)の内容に注意を払っていることは、ある程度感じてはいた。それが今回のテキストマイニングでの分析によって、より具体的に紙面とデータでのやりとりの差が明らかとなった。データによるフィードバックのやりとり以外に良い方法が当初は思いつかなかったというのが本当のところではある。しかしアナログのものをデジタルに変換しただけで、何かそのほかに付与するものがあるとはこの分析結果を得るまで想定していなかった。対面フィードバックの内容をデジタル化しただけでは紙面フィードバックの良さで示された「気持ち」、「絵文字」が抜け落ちていることが分析結果から明らかとなった。現役の教師からすれば些細なこととも思えるかもしれないが、これらが大学生が初めて英語で行った模擬授業に対するピア・フィードバックがオンラインと紙面の違いで印象に残ったことである。それらが肯定的な印象として受け取られていることを大切に、できれば肯定的な印象は減ることのないように授業担当者は

工夫を心がけたい。

今回の自由記述回答をテキストマイニングで分析した結果、「気持ち」「絵文字」「感じる」という語は繰り返し出現し、さらには印象に残るキーワードとして抽出された。このことは対面形態での模擬授業を実施できるのであれば、紙面でのピア・フィードバックに根拠をもって実践することができる。それと同時に、もし今後不測の事態が起これば、再度対面での模擬授業が実施できない環境下となった時にピア・フィードバックの際の注意点を促す必要性を認識することができた。いずれにしても今後の本科目における授業改善にとっても役立つ調査であったと言える。

5-2 限界点と今後の課題

まず今回は授業者によって実施された調査である。今後は調査協力者を得て、調査実施者と実践者は異なる方が望ましい。

次に参加者の人数が18名では十分ではないと思われる。教職課程在籍者数はそう多くはないため、他大学も含めて調査協力者を得て、参加者を多くすることで調査結果の信頼度向上を臨みたい。そして重要となるのが、参加者の人数に加えて性別である。今回の調査参加者は女性だけとなった。ゆえに、性別によって差があるのか否か今回の調査では比較検討は不可能である。教職課程科目は特に「教育職」という業務内容から勘案しても何事もジェンダーレスを心がけたいことには違いないが、この問題は継続研究とし稿を改めたい。

引用・参考文献

- 樋口耕一(2020年)『社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－第2版』東京：ナカニシ出版。
- 牧野眞貴(2012年)「実践的指導の自己評価と自己省察の関係についての考察－小学校外国語活動指導実践の省察力を高めるために－」『日本教科教育学会誌』第35巻、第2号、pp. 1-10.
- 牛澤賢二(2021年)『やってみようテキストマイニング－自由回答アンケートの分析に挑戦！増訂

模擬授業へのピア・フィードバックに関する研究

版－』 東京：朝倉書店。

吉住香織（2022年）「オンライン授業の可能性と課

題－英語科教育法における授業実践を通して－」

『教職研究』第37号，pp. 39-51.